

修士論文概要書

**JSL 青少年の日本語学習の動機に関する一考察
—日本語学習に影響を与えた「他者の存在」について—**

早稲田大学大学院日本語教育研究科 修士課程

金澤日佐子

第一章 本研究の目的と課題

1-1 本研究の背景

日本語を第二言語とする (Japanese as a Second Language :以下 J S L) 児童・生徒たちの数は年々増加傾向にある (文部科学省 H P)。日本語学校で学ぶ学習者の多くが大学進学や日本語能力試験合格に向け日本語学習に臨んでいる一方、J S L 児童・生徒には日本語学習に励むもの、学習に意欲的に取り組んでいるとは言いがたいものがある。そして、ある時は日本語学習に大変な意欲を持って臨んでいたが、次の指導の機会には全く興味を示さないといったことがある。日本語学習へ向かう姿勢が一貫していないように感じられることも多い。

年齢や来日の背景だけを挙げて、前・後者双方の日本語学習に対する意欲・動機は異なるものと考えられる。以上のことからその関係・相違を生み出す要因を調査・検討したい。

1-2 問題の所在

第二言語としての日本語学習の動機づけの要因、学習意欲との関係を明らかにした先行研究は多数見られるが、その要因や関係について実践にまで踏み込んで考察した研究は管見の及ぶ限りない。動機づけ研究が実践にまで踏み込まない (踏み込めない) 理由としては、学習動機の要因が複数あるため、また多様性があるためだと考える。

本研究では大勢の学習者を対象に一斉に行う調査ではなく、調査協力者一人ひとりから日本語学習の動機を尋ねる。そのため一人ひとり異なった動機の要因が明らかになると考える。また、調査協力者の日本語学習の動機が減退している状況に着目するため、調査協力者がその時点で必要としていた学習動機も把握できる可能性があると考えている。

1-3 本研究の目的

本調査・事例報告の結果・考察を踏まえ、J S L 児童・生徒の日本語学習動機の要因の考察と、その学習動機が低下した場合の支援方法の一提案を行う。そして事例報告を含む記述をすることがケース・スタディーともなると考え、研究目的の一つとした。学習者の動機の減退が明らかになった際の、何らかの支援の一方策をより明確に提示できるものと考え。そして、そうした支援を行うことが、J S L 児童・生徒が日本語学習に意欲的に臨む支えとなるであろうと考える。

第二章 日本語の学習動機・動機づけについての先行研究

2-1 動機・動機づけについて

第二言語教育の先行研究で用いられている「motivation」の訳語には「動機」・「動機づけ」が使用されている。本稿を執筆するにあたり、先行研究でも混用されているその両者に対して、整理が必要であると考えた。本稿で用いる「動機」とは、広辞苑（第五版）で「人がその行動や行為を決定する意識的または無意識的原因」とされているように、学習者が行動を始めるきっかけとなる原因的事象のことであるとした。そして同じく本稿で用いる「動機づけ」については、原因的事象である「動機」が学習者の学習に対するやる気や、学習に臨む意欲的な姿勢を喚起・減退させるプロセスを指すものであるとした。

2-2 第二言語教育における動機研究の流れ

第二言語習得の動機研究においては、目標言語話者の集団やその文化、言語をより深く知り、その中に溶け込みたいと希望する「統合的動機」と、よりよい仕事や待遇を得るためや、大学に入るためにその言語を学ぶという実用的なものである「道具的動機」といった動機に対する考え方がある。

教育心理学では動機を、学習者自身の自発的な取り組みであり学習が目標であるとする「内発的動機」と、学習者以外からの働きかけによる外発的な取り組みであり学習は手段であるとする「外発的動機」の2つに分けている。

2-3 日本語教育における動機研究の流れ

第二言語教育の領域において動機づけの研究が行われるようになったのは1960年前後のことである。続いて90年代以降、第二言語としての日本語教育の動機づけの研究が取り上げられてきた。

日本語教育における動機研究は、ある特定の日本語学習集団の持つ日本語学習動機を、それを取り巻く社会環境保有の性質も考慮したうえで解明してきた。そして、学習集団、教室活動に対する動機研究のみならず、調査者の観察や内省などを用いた縦断的・質的な研究の開発の必要性も指摘されてきた。

本稿でもまず、質問紙などを用いる特定の学習集団について調査を行った先行研究を整理した。そして教室活動に関係する先行研究に言及し、続いて、90年代後半に行われ出したインタビュー調査などを用いた先行研究の整理を行った。

第三章 予備調査と分析

3-1 予備調査の概要

調査協力者に質問紙に回答してもらい、その回答をもとに口頭による事実関係の確認を行っていった。その後、日本語の学習動機に影響したと思われる出来事・人について1～2時間の「非構造化インタビュー」を行った。録音は調査協力者の了解を得た上で、調査の開始時から行った。

調査では、JSL青少年に自身の「ライフストーリー」についての「語り」を行ってもらった。協力者の「語り」の間は、調査者の主観性を無視することはせず、むしろそれを積極的に表明していくことが目指されているとされる、「語り合い法」を用いた。そしてそのインタビュー調査をテキスト化するにあたっては、全過程を逐語起こしすることとした。考察の観点とする「一人の学習者のコンテキスト」を分析する際は「KJ法」を用いた。

3-2 予備調査の目的と概要

2006年6月5日に調査協力者としてAさんに質問紙への回答、「語り」を含め、2時間程度のインタビュー調査をした。調査の結果、Aさんの中学生時代の主な日本語学習の動機は、他者への「仕返し」であった。このような、先行研究には見られない、他者に対する攻撃とも防御とも言える「仕返し」は、中学生という年齢・学習環境によるものであろうかと考えた。また、Aさんの「語り」からは、Aさんが諦めを感じた状況下での動機づけが顕著となった。そのことから、このような学習の動機は、Aさん自身が望む形での動機づけになり得ないと明らかになった。筆者は調査者としてこの事例と出会い「語り合い」を行うことで、学習についての動機研究がその要因抽出にとどまることで見逃される可能性のある、学習者の「動機の質」について考えることとなった。

筆者は学習者が学習を行う際の動機が、どんな理由に依るものでも良いとは考えない。少なくとも学習者自身の苦痛であってはならないと考える。そして、日本語を支援する一支援者として、たとえ日本語学習の動機づけになっていたとしても、Aさんの「語り」にあるような、聞くに耐えがたい動機づけはあってはならないと考えるに至った。

第四章 本調査と分析

4-1 本調査の概要と対象

本調査では、6名の調査協力者のインタビュー結果から、筆者が特にその日本語学習の減退が顕著であったと考えるDさんの「語り」をKJ図をもって分析を試みることにした。ここではDさんが「頑張れる」とする動機を、「他者からの理解」であり、「他者から自身への働きかけ」であり、「自身から他者への働きかけ」であるとしていることが明らかになった。

本調査の結果として、Dさんの日本語学習にはいくつかの動機が存在するが、実際の日本語学習を行う際には、その中でも特に自身を「理解してくれる他者」の存在があることが好ましく、効果的であるといったことが明らかとなった。

4-2 <事例報告>—Dさんのケース—

本調査の後半に事例報告として「—Dさんのケース—」を設け、学習の動機に減退が見られたDさんにピアサポート活動に参加してもらうこととした。Dさんと先輩学習者であるロールモデルJさんとが対話できる場面を設定し、その接触した前後の日本語学習の動機・意欲の変動を観察し、考察を行った。次に、Dさんがロールモデルとなり、後輩学習者Cさんと対話を行う場面を設け、観察・考察を行った。

実際行われたピアサポート活動では大変活発な対話が行われたことから、来日し、日本語学習を行ったという共通の経験が、ロールモデルとその後輩学習者に親近感を覚えさせたものであると考えられる。筆者は両者の共感が、この活動によるロールモデルの存在の意味であると考えている。

後日、DさんにJさんについての感想を尋ねる機会があった。その際、DさんがJさんへメールを送るといった「他者への働きかけ」を行おうとしていることを知り、本調査の結果からも明らかになっている、Dさんの日本語学習への動機づけが間接的にはあるが、行われたものであると考えた。

その一方、Cさんはその後の筆者との話しの中で、「大学が怖くなくなった。自分も行けるんじゃないかと思った。」という内容のことを語っている。そして現在、日本語能力検定試験の受験についてもその参考書を探すなど、真剣に検討している。このことも、ロールモデルであるDさんの存在が、Cさんにその日本語学習の動機づけを行ったものであると考えている。

第五章 結論と今後の課題

5-1 本研究の結論

教育心理学の分野では、学習が内発的動機づけによって行われることを現実的であると、合理的であるとしている。その観点からAさんの「他者への仕返し」という動機を考察すると、Aさんが自発的に日本語学習を行っていることから、それは効果的な学習の動機であると言えると考えられる。

しかし、Aさんの調査結果から筆者は、日本語学習のやる気を喚起する動機が、学習者がその動機によって自発的に学習に臨むような場合でも、学習者自身の望むものでなければいけないと結論づけた。そして、そのことから「動機の質」について考えるに至った。

5-2 日本語学習の動機と「他者の存在」

Aさんの「語り」には、Aさんを「理解する他者」が欠乏していた。この調査結果は、筆者に改めて日本語学習を学ぶものへの「他者の理解」の必要性を確信させた。そして、その結果を踏まえて設定された、Dさんに対するピアサポート活動では、参加する両者が共有する「場」があり、「他者の存在」を確認し、「他者の理解」が得られることで、日本語学習への動機づけが行われる可能性があることが示唆された。

本研究からは日本語学習において、動機としての「他者の存在」が絶対的に必要であるとは、明言できないと考える。しかし、「理解ある他者の存在」は、学習者が日本語学習を行う際の支えとなること、また学習者自身もその「他者」を必要としていることが明らかとなった。そして「他者の存在」を意識した行為が、語学教師が介入できる領域でないとされた、学習の中心的動機に働きかけ、学習者が日本語学習を行う際の一助となり得る可能性があることを示唆できる結果となった。

5-3 今後の課題

一つ目の課題として、JSL児童・生徒が「一人の学習者」として成長し、JSL青少年となることを踏まえ、その動機研究もその成長・発達の段階に考慮した心理学的なアプローチの必要性があると考えた。二つ目の課題として、その効果を明らかにするためにも、ピアサポート活動に参加した協力者に対して追跡調査を行う必要があると考えている。そして三つ目の課題として、「一人の学習者」の持つ学習の「動機の質」を考慮した教授活動・教授計画の研究の必要性があると考えられる。